

ゼロ弾きのゴーシュ

目次

セロ弾きのゴーシュ-----	3
----------------	---

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾く係りでした。けれどもあんまり上手でないという評判でした。上手でないどころではなく実は仲間の楽手のなかではいちばん下手でしたから、いつでも楽長にいじめられるのでした。

ひるすぎみんなは楽屋に円くならんで今度の町の音楽会へ
だいろくこうきょうきょく
出す第六交響曲の練習をしていました。

トランペットは一生けん命歌っています。

ヴァイオリンも二いろ風のように鳴っています。

クラリネットもボーボーとそれに手伝っています。

ゴーシュも口をりんと結んで眼を皿のようにして楽譜を見
め さら
つめながらも一心に弾いています。

にわかにはたとと楽長が両手を鳴らしました。みんなぴたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

「セロがおくれた。トオテテ テテテイ、ここからやり直し。
はいっ。」

みんなは今の所の少し前の所からやり直しました。ゴーシュは顔をまっ赤にして額に汗を出しながらやっといま云われたところを通りました。ほっと安心しながら、つづけて弾いてい
う
ますと楽長がまた手をぱつと拍ちました。

「セロっ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」

みんなは気の毒そうにしてわざとじぶんの譜をのぞき込
こ

だりじぶんの楽器をはじめて見たりしています。ゴーシュはあ
わてて糸を直しました。これはじつはゴーシュも悪いのですが
セロもずいぶん悪いのでした。

「今の前の小節から。はいっ。」

みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげて一生けん
命です。そしてこんどはかなり進みました。いいあんばいだと
思っていると楽長がおどすような形をしてまたぱたっと手を
拍ちました。またかとゴーシュはどきっとしましたがありがた
いことにはこんどは別の人でした。ゴーシュはそこでさつきじ
ぶんのときみんながしたようにわざとじぶんの譜へ眼を近づ
けて何か考えるふりをしていました。

「ではすぐ今の次。はいっ。」

そらと思って弾き出したかと思うといきなり楽長が足をど
んと踏^ふんでどなり出しました。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。
それがこんながさがさしたことで。諸君。演奏までもうあと十
日しかないんだよ。音楽を専門にやっているぼくらがああ
かなぐつ^{かなぐつ}かじ^{でっち}の砂糖屋^{でっち}の丁稚^{めんもく}なんかの寄り集りに負けてしまっ
たらいったいわれわれの面目はどうなるんだ。おいゴーシュ君。
君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。
怒^{おこ}るも喜ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにど
うしてもぴたっと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだ

けとけた靴くつのひもを引きずってみんなのあとをついてあるく
ようなんだ、困るよ、しっかりしてくれないとねえ。光輝こうきある
わが金星音楽団がきみ一人のために悪評をとるようなことで
は、みんなへもまったく気の毒だからな。では今日は練習はこ
こまで、休んで六時にはかっきりボックスへ入ってくれ給え。」
たま

みんなはおじぎをして、それからたばこをくわえてマッチを
すったりどこかへ出て行ったりしました。ゴーシュはその粗末
はこな箱なみだみたいなセロをかかえて壁かべの方へ向いて口をまげてぼろ
ぼろ涙をこぼしましたが、気を取り直してじぶんだけたった
ひとりいまやったところをはじめからしずかにもいちど弾き
はじめました。

その晩遅くおそゴーシュは何かおお巨きな黒いものをしょってじぶ
んの家へ帰ってきました。家といってもそれは町はずれの川ば
たにあるこわれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたった一人で
すんでいて午前えだは小屋のまわりの小さな畑でトマトの枝をき
ったり甘藍キャベジの虫をひろったりしてひるすぎになるといつも出
て行っていたのです。ゴーシュがうちへ入ってあかりをつける
とさっきの黒い包みをあけました。それは何でもない。あの夕
方のごつごつしたセロでした。ゴーシュはそれを床の上にそっ
と置くと、いきなり棚たなからコップをとってバケツの水をごくご
くのみました。

それから頭を一つふって椅子いすへかけるとまるで虎とらみたいな

いきおい

勢でひるの譜を弾きはじめました。譜をめくりながら弾いては考え考えては弾き一生けん命しまいまで行くとまたはじめからなんべんもなんべんもごうごうごうごう弾きつづけました。

夜中もとうにすぎてしまいもうじぶんが弾いているのかもわからないようになって顔もまっ赤になり眼もまるで血走ってとても物凄^{ものすご}い顔つきになりいまにも倒れるかと思うように見えました。

そのとき誰^{たれ}かうしろの扉^とをとんとんと叩くものがありました。

「ホーシュ君か。」ゴーシュはねぼけたように叫^{さけ}びました。ところがすうと扉^おを押してはいつて来たのはいままで五六ぺん見たことのある大きな三毛猫^{みけねこ}でした。

ゴーシュの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持って来てゴーシュの前におろして云いました。

「ああくたびれた。なかなか運搬^{うんぱん}はひどいやな。」

「何だと」ゴーシュがききました。

「これおみやです。たべてください。」三毛猫が云いました。

ゴーシュはひるからのむしゃくしゃを一ぺんにどなりつけました。

「誰がきさまにトマトなど持ってこいと云った。第一おれがきさまらのもってきたものなど食うか。それからそのトマトだっ

ておれの畑のやつだ。何だ。赤くもならないやつをむしって。いままでもトマトの茎^{くき}をかじったりけちらしたりしたのはおまえだろう。行ってしまえ。ねこめ。」

すると猫は肩^{かた}をまるくして眼をすぼめてはいましたが口のあたりでにやにやわらって云いました。

「先生、そうお怒りになっちゃ、おからだにさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらんなさい。きいてあげますから。」

「生意気なことを云うな。ねこのくせに。」

セロ弾きはしゃくにさわってこのねこのやつどうしてくれようとしばらく考えました。

「いやご遠慮^{えんりょ}はありません。どうぞ。わたしはどうも先生の音楽をきかないとねむられないんです。」

「生意気だ。生意気だ。生意気だ。」

ゴーシュはすっかりまっ赤になってひるま樂長のしたように足ぶみしてどなりましたがにわかに気を変えて云いました。

「では弾くよ。」

ゴーシュは何と思ったか扉^とにかぎをかけて窓もみんなしめてしまい、それからセロをとりだしてあかしを消しました。すると外から二十日過ぎの月のひかりが室^{へや}のなかへ半分ほどはいってきました。

「何をひけと。」

「トロメライ、ロマチックシューマン作曲。」猫は口を拭いて済まして云いました。

「そうか。トロメライというのはこういうのか。」

セロ弾きは何と思ったかまずはんけちを引きさいてじぶんの耳の穴へぎっしりつめました。それからまるで嵐あらしのような勢いきおいで「印度インドの虎狩とらがり」という譜を弾きはじめました。

すると猫はしばらく首をまげて聞いていましたがいきなりパチパチパチッと眼をしたかと思うとぱっと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりどんと扉へからだをぶっつけましたが扉はあきませんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたという風にあわてだして眼や額からぱちぱち火花を出しました。するとこんどは口のひげからも鼻からも出ましたから猫はくすぐったがってしばらくくしゃみをするような顔をしてそれからまたさあこうしてはいられないぞというようにおもしろはせあるきだしました。ゴーシュはすっかり面白くなってますます勢よくやり出しました。

「先生もうたくさんです。たくさんですよ。ご生ですからやめてください。これからもう先生のタクトなんかとりませんから。」

「だまれ。これから虎をつかまえる所だ。」

猫はくるしがってはねあがってまわったり壁にからだをくっつけたりしましたが壁についたあとはしばらく青くひかる

のでした。しまいには猫はまるで風車のようにぐるぐるぐるぐる
ゴーシュをまわりました。

ゴーシュもすこしぐるぐるして来ましたので、
「さあこれで許してやるぞ」と云いながらようようやめました。
すると猫もけろりとして

「先生、こんやの演奏はどうかしてますね。」と云いました。

セロ弾きはまたぐつとしゃくにさわりましたが何気ない風
で巻たばこを一本だして口にくわえそれからマッチを一本と
って

「どうだい。工合^{ぐあい}をわるくしないかい。舌を出してごらん。」

猫はばかにしたように尖^{とが}った長い舌をベロリと出しました。

「ははあ、少し荒^あれたね。」セロ弾きは云いながらいきなりマ
ッチを舌でシュッとすってじぶんのたばこへつけました。さあ
猫は^{おどろ}愕いたの何の舌を風車のようにふりまわしながら入り口
の扉^とへ行って頭でどんとぶつつかつてはよろよろとしてまた
戻^{もど}って来てどんとぶつつかつてはよろよろまた戻って来てま
たぶつつかつてはよろよろにげみちをこさえようとしてました。

ゴーシュはしばらく面白そうに見ていましたが

「出してやるよ。もう来るなよ。ばか。」

セロ弾きは扉をあけて猫が風のように萱^{かや}のなかを走って行
くのを見てちょっとわらいました。それから、やっとせいせい
したというようにぐっすりねむりました。

次の晩もゴーシュがまた黒いセロの包みをかついで帰ってきました。そして水をごくごくのむとそっくりゆうべのとおりぐんぐんセロを弾きはじめました。十二時は間もなく過ぎ一時もすぎ二時もすぎてもゴーシュはまだやめませんでした。それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからずごうごうやっていますと誰か屋根裏をこっこつと叩くものがあります。

「猫、まだこりないのか。」

ゴーシュが叫びますといきなり天井の穴からぼろんと音がして一疋の灰いろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見るとそれはかつこうでした。

「鳥まで来るなんて。何の用だ。」ゴーシュが云いました。

「音楽を教わりたいのです。」

かつこう鳥はすまして云いました。

ゴーシュは笑って

「音楽だと。おまえの歌は、かつこう、かつこうというだけじゃあないか。」

するとかつこうが大へんまじめに

「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ。」と云いました。

「むずかしいもんか。おまえたちのはたくさん啼くのがひどいだけで、なきようは何でもないじゃないか。」

「ところがそれがひどいんです。たとえばかっこうとこうなくのとかっこうとこうなくのとは聞いていてもよほどちがうでしょう。」

「ちがわないね。」

「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかっこうと一万云えば一万みんなちがうんです。」

「勝手だよ。そんなにわかっているなら何もおれの^{ところ}処へ来なくてもいいではないか。」

「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。」

「ドレミファもくそもあるか。」

「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです。」

「外国もくそもあるか。」

「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついてうたいますから。」

「うるさいなあ。そら三べんだけ弾^ひいてやるからすんだらさっさと帰るんだぞ。」

ゴーシュはセロを取り上げてボロンボロンと糸を合わせてドレミファソラシドとひきました。するとかっこうはあわてて羽をばたばたしました。

「ちがいます、ちがいます。そんなんでないんです。」

「うるさいなあ。ではおまえやってごらん。」

「こうですよ。」かっこうはからだをまえに曲げてしばらく構

えてから

「かっこう」と一つなきました。

「何だい。それがドレミファかい。おまえたちには、それでは
ドレミファも第六交響楽も同じなんだな。」

「それはちがいます。」

「どちらがうんだ。」

「むずかしいのはこれをたくさん続けたのがあるんです。」

「つまりこうだろう。」セロ弾きはまたセロをとって、かっこ
うかっこうかっこうかっこうかっこうとつづけてひきました。

するとかっこうはたいへんよろこんで途中からかっこうか
っこうかっこうかっこうとついで叫びました。それももう一生
けん命からだをまげていつまでも叫ぶのです。

ゴーシュはとうとう手が痛くなって

「こら、いいかげんにしないか。」と云いながらやめました。す
るとかっこうは残念そうに眼をつりあげてまだしばらくない
ていましたがやっと

「……かっこうかくうかっかっかっか」
と云ってやめました。

ゴーシュがすっかりおこってしまって、

「こらとり、もう用が済んだらかえれ」と云いました。

「どうかもういっぺん弾いてください。あなたのはいいようだ
けれどもすこしちがうんです。」

「何だと、おれがきさまに教わってるのではないんだぞ。帰らんか。」

「どうかたったもう一ぺんおねがいです。どうか。」 かつこうは頭を何べんもこんこん下げました。

「ではこれっきりだよ。」

ゴーシュは弓をかまえました。かつこうは「くっ」とひとつ息をして

「ではなるべく永くおねがいたします。」 といってまた一つおじぎをしました。

「いやになっちまうなあ。」 ゴーシュはにが笑いしながら弾きはじめました。するとかつこうはまたまるで本気になって「かつこうかつこうかつこう」とからだをまげてじつに一生けん命叫びました。ゴーシュははじめはむしゃくしゃしていましたがいつまでもつづけて弾いているうちにふっと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミファにはまっているかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかつこうの方がいいような気がするのですでした。

「えいこんなばかなことしていたらおれは鳥になってしまうんじゃないか。」 とゴーシュはいきなりぴたりとセロをやめました。

するとかつこうはどしんと頭を叩かれたようにふらふらつととしてそれからまたさっきのように

「かっこうかっこうかっこうかっかっかっかっかっ」と云って
やめました。それから恨めし^{うら}そうにゴーシュを見て

「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意気地ないやつでも
のどから血が出るまでは叫ぶんですよ。」と云いました。

「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしてられるか。
もう出て行け。見ろ。夜があけるんじゃないか。」ゴーシュは窓
を指さしました。

東のそらがぼうっと銀いろになってそこをまっ黒な雲が北
の方へどンドン走っています。

「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちょっとです
から。」

かっこうはまた頭を下げました。

^{だま}「黙れっ。いい気になって。このばか鳥め。出て行かんとむし
って朝飯に食ってしまうぞ。」ゴーシュはどんと床をふみまし
た。

するとかっこうはにわか**に**びっくりしたようにいきなり窓
をめがけて飛び立ちました。そして硝子^{ガラス}にはげしく頭をぶつ
けてばたつと下へ落ちました。

「何だ、硝子へばかだなあ。」ゴーシュはあわてて立って窓を
あけようとしたんですが元来この窓はそんなにいつでもするす
る開く窓ではありませんでした。ゴーシュが窓のわくをしきり
にがたがたしているうちにまたかっこうがばつとぶつつかっ

て下へ落ちました。見ると 嘴^{くちばし} のつけねからすこし血が出ています。

「いまあけてやるから待っていろつたら。」 ゴーシュがやっと二寸ばかり窓をあけたとき、かっこうは起きあがって何が何でもこんどこそというようにじっと窓の向うの東のそらをみつめて、あらん限りの力をこめた風でぱっと飛びたちました。もちろんこんどは前よりひどく硝子につきあたってかっこうは下へ落ちたまましばらく身動きもしませんでした。つかまえてドアから飛ばしてやろうとゴーシュが手を出しましたらいきなりかっこうは眼をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛びつきそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて窓をぱっとけりました。ガラスは二三枚物すごい音して砕け窓^{くだ}はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとした窓のあとをかっこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまっすぐに飛んで行ってとうとう見えなくなっていました。ゴーシュはしばらく^{あき}呆れたように外を見ていましたが、そのまま倒れるように室のすみへころがって睡^{ねむ}ってしまいました。

次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水^{いっぱい}を一杯のんでいまして、また扉^とをこつこつ叩^{たた}くものがあります。

今夜は何か来てもゆうべのかっこうのようにはじめからおどかして追^{はら}い払ってやろうと思ってコップをもったまま待ち

構えて居りますと、扉がすこしあいて一足の狸たぬきの子がはいってきました。ゴーシュはそこでその扉をもう少し広くひらいて置いてどんと足をふんで、

「こら、狸、おまえは狸汁たぬきじるということを知っているかつ。」とどなりました。すると狸の子はぼんやりした顔をしてきちんと床すわへ座ったままだうもわからないというように首をまげて考えていましたが、しばらくたって

「狸汁たぬきってぼく知らない。」と云いました。ゴーシュはその顔を見て思わず吹き出そうとしましたが、まだ無理に怖い顔こわをして、

「では教えてやろう。狸汁というのはな。おまえのような狸をな、キャベジや塩とまぜてくたくたと煮にておれさまの食うようにしたものだ。」と云いました。すると狸の子はまたふしぎそうに

「だってぼくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人でこわくないから行って習えと云ったよ。」と云いました。そこでゴーシュもとうとう笑い出してしまいました。

「何を習えと云ったんだ。おれはいそがしいんじゃないか。それに睡いんだよ。」

狸の子は俄にわかに勢いきおいがついたように一足前へ出ました。

「ぼくは小太鼓こだいこの係りでねえ。セロへ合わせてもらって来いと云われたんだ。」

「どこにも小太鼓がないじゃないか。」

「そら、これ」狸の子はせなかから棒きれを二本出しました。

「それでどうするんだ。」

「ではね、『^{ゆかい}愉快的馬車屋』を弾いてください。」

「なんだ愉快的馬車屋ってジャズか。」

「ああこの譜だよ。」狸の子はせなかからまた一枚の譜をとり出しました。ゴーシュは手にとってわらい出しました。

「ふう、変な曲だなあ。よし、さあ弾くぞ。おまえは小太鼓を叩くのか。」ゴーシュは狸の子がどうするのかと思ってちらちらそっちを見ながら弾きはじめました。

すると狸の子は棒をもってセロの駒^{こま}の下^{ひょうし}のところを拍子をとってぼんぼん叩きはじめました。それがなかなかうまいので弾いているうちにゴーシュはこれは面白いぞと思いました。

おしまいまでひいてしまうと狸の子はしばらく首をまげて考えました。

それからやっと考えついたというように云いました。

「ゴーシュさんはこの二番目の糸をひくときはきたいに遅れるねえ。なんだかぼくがつまずくようになるよ。」

ゴーシュははっとしました。たしかにその糸はどんなに手早く弾いてもすこしたってからでないと音が出ないような気がゆうべからしていたのでした。

「いや、そうかもしれない。このセロは悪いんだよ。」とゴーシ

ユはかなしそうに云いました。すると狸は気の毒そうにしてまたしばらく考えていましたが

「どこが悪いんだろうなあ。ではもうーぺん弾いてくれますか。」

「いいとも弾くよ。」ゴーシュははじめました。狸の子はさっきのようにとんとん叩きながら時々頭をまげてセロに耳をつけるようにしました。そしておしまいまで来たときは今夜もまた東がぼうと明るくなっていました。

「ああ夜が明けたぞ。どうもありがとう。」狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかへしょってゴムテープでばんちんとめておじぎを二つ三つすると急いで外へ出て行ってしまいました。

ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいつてくる風を吸っていましたが、町へ出て行くまで睡^{もど}って元気をとり戻^こそうと急いでねどこへもぐり込みました。

次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近く思わずつかれて楽譜をもったまもうとうとしていますとまた誰か扉^{たれ}をこつこつと叩くものがあります。それもまるで聞えるか聞えないかの位でしたが毎晩のことなのでゴーシュはすぐ聞きつけて「おはいり。」と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一ぴきの野ねずみでした。そして大へんちいさなこどもをつれてちょろちょろとゴーシュの前へ歩いてきました。そ

のまた野ねずみのこどもときたらまるでけしごむのくらいしかないでゴーシュはおもわずわらいました。すると野ねずみは何をわらわれたろうというようにきょろきょろしながらゴーシュの前に来て、青い栗^{くり}の実を一つぶ前においてちゃんとおじぎをして云いました。

「先生、この児^こがあんばいがわるくて死にそうでございますが先生お慈悲^{じひ}になおしてやってくださいまし。」

「おれが医者などやれるもんか。」ゴーシュはすこしむっとして云いました。すると野ねずみのお母さんは下を向いてしばらくくだまっていたがまた思い切ったように云いました。

「先生、それはうそでございます、先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか。」

「何のことだかわからんね。」

「だって先生先生のおかげで、兎^{うさぎ}さんのおばあさんもなおりましたし狸さんのお父さんもなおりましたしあんな意地悪のみみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけないとはあんまり情ないことでございます。」

「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病気なんどなおしてやったことはないからな。もっとも狸の子はゆうべ来て楽隊のまねをして行ったがね。ははん。」ゴーシュは呆^{あき}れてその子ねずみを見おろしてわらいました。

すると野鼠^{のねずみ}のお母さんは泣きだしてしまいました。

「ああこの児はどうせ病気になるならもっと早くなればよかった。さっきまであれ位ごうごうと鳴らしておいでになったのに、病気になるといっしょにぴたっと音がとまってもうあとはいくらおねがいしても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう。」

ゴーシュはびっくりして叫びました。

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや兎の病気がなおると。どういうわけだ。それは。」

野ねずみは眼を片手でこすりこすり云いました。

「はい、ここのものは病気になるとみんな先生のおうちの床下にはいつて療すのでございます。」

「すると療るのか。」

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなって大へんいい気持ちですぐ療る方もあればうちへ帰ってから療る方もあります。」

「ああそうか。おれのセロの音がごうごうひびくと、それがあんまの代りになっておまえたちの病気がなおるというのか。よし。わかったよ。やってやろう。」ゴーシュはちょっとギウギウと糸を合せてそれからいきなりのねずみのこどもをつまんでセロの孔から中へ入れてしまいました。

「わたしもいっしょについて行きます。どこの病院でもそうですから。」おっかさんの野ねずみはきちがいようになってセ

口に飛びつきました。

「おまえさんもはいるかね。」セロ弾きはおっかさんの野ねずみをセロの孔からくぐしてやろうとしましたが顔が半分しかはいりませんでした。

野ねずみはばたばたしながら中のこどもに叫びました。

「おまえそこはいいかい。落ちるときいつも教えるように足をそろえてうまく落ちたかい。」

「いい。うまく落ちた。」こどものねずみはまるで蚊^かのような小さな声でセロの底で返事しました。

「大丈夫さ。だから泣き声出すなというんだ。」ゴーシュはおっかさんのねずみを下におろしてそれから弓をとって何とかラブソディとかいうものをごうごうがあがあ弾きました。するとおっかさんのねずみはいかにも心配そうにその音の工合^{ぐあい}をきいていましたがとうとうこらえ切れなくなったふうで

「もう沢山^{たくさん}です。どうか出してやってください。」と云いました。

「なあんだ、これでいいのか。」ゴーシュはセロをまげて孔のところに手をあてて待っていましたら間もなくこどものねずみが出てきました。ゴーシュは、だまってそれをおろしてやりました。見るとすっかり目をつぶってぶるぶるぶるぶるふるえていました。

「どうだったの。いいかい。気分は。」

こどものねずみはすこしもへんじもしないでまだしばらく眼をつぶったままぶるぶるぶるふるえていましたがにわかに起きあがって走りだした。

「ああよくなったんだ。ありがとうございます。ありがとうございます。」おっかさんのねずみもいっしょに走っていましたが、まもなくゴーシュの前に来てしきりにおじぎをしながら「ありがとうございますありがとうございます」と十ばかり云いました。

ゴーシュは何がなかあいそうになって

「おい、おまえたちはパンはたべるのか。」とききました。

すると野鼠はびっくりしたようにきょろきょろあたりを見まわしてから

「いえ、もうおパンというものは小麦の粉をこねたりむしたりしてこしらえたものでふく^{ふく}膨らんでいておいしいものなそうでございますが、そうでなくても私どもはおうちの戸^と棚^{だな}へなど参ったこともございませんし、ましてこれ位お世話になりながらどうしてそれを運びになんぞ参れましょう。」と云いました。

「いや、そのことではないんだ。ただたべるのかときいたんだ。ではたべるんだな。ちょっと待てよ。その腹の悪いこどもへやるからな。」

ゴーシュはセロを床へ置いて戸棚からパンを一つまみむし

って野ねずみの前へ置きました。

野ねずみはもうまるでばかのようになって泣いたり笑ったりおじぎをしたりしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。

「あああ。鼠と話すのもなかなかつかれるぞ。」ゴーシュはねどこへどっかり倒れてすぐぐうぐうねむってしまいました。

それから六日目の晩でした。金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールの裏にある控室へみんなぱつと顔をほてらせてめいめい楽器をもって、そろそろホールの舞台から引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールでは拍手の音がまだ嵐のように鳴って居ります。楽長はポケットへ手をつつ込んで拍手なんかどうでもいいというようにのそのそみんなの間を歩きまわっていましたが、じつはどうして嬉しきでいっぱいなのでした。みんなはたばこをくわえてマッチをすったり楽器をケースへ入れたりしました。

ホールはまだぱちぱち手が鳴っています。それどころではなくいよいよそれが高くなって何だかこわいような手がつけられないような音になりました。大きな白いリボンを胸につけた司会者がはいって来ました。

「アンコールをやっていますが、何かみじかいものでもきかせてやってくださいませんか。」

すると楽長がきつとなって答えました。「いけませんな。こ

ういう大物のあとへ何を出したってこっちの気の済むように
は行くもんでないんです。」

「では楽長さん出て一寸挨拶してください。」
ちよつとあいさつ

「だめだ。おい、ゴーシュ君、何か出て弾いてやってくれ。」

「わたしがですか。」 ゴーシュは呆氣にとられました。
あつけ

「君だ、君だ。」 ヴァイオリンの一番の人がいきなり顔をあげ
て云いました。

「さあ出て行きたまえ。」 楽長が云いました。みんなもセロを
むりにゴーシュに持たせて扉をあけるといきなり舞台へゴー
シュを押し出してしまいました。ゴーシュがその孔のあいたセ
ロをもってじつに困ってしまつて舞台へ出るとみんなはそら
見ろというように一そうひどく手を叩きました。たた わあと叫んだ
ものもあるようでした。

「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ていろ。印度の虎狩
インド とらがり
をひいてやるから。」 ゴーシュはすっかり落ちついて舞台のま
ん中へ出ました。

それからあの猫の来たときのようにまるで怒った象のよう
ねこ な勢で虎狩りを弾きました。ところが聴衆はしいんとなつ
いきおい て一生けん命聞いています。ゴーシュはどんどん弾きました。
おこ 猫が切ながってぱちぱち火花を出したところも過ぎました。扉
ちょうしゅう へからだを何べんもぶつつけた所も過ぎました。

曲が終るとゴーシュはもうみんなの方などは見もせずちょ

うどその猫のようにすばやくセロをもって楽屋へ^に遁げ込みました。すると楽屋では楽長はじめ仲間がみんな火事にでもあったあのように眼をじっとしてひっそりとすわり込んでいます。ゴーシュはやぶれかぶれだと思ってみんなの間をさっさとあるいて行って向うの^{ながいす}長椅子へどっかりとからだをおろして足を組んですわりました。

するとみんなが一ぺんに顔をこっちへ向けてゴーシュを見ましたがやはりまじめでべつにわらっているようでもありませんでした。

「こんやは変な晩だなあ。」

ゴーシュは思いました。ところが楽長は立って云いました。「ゴーシュ君、よかったぞお。あんな曲だけれどもここではみんなかなり本気になって聞いてたぞ。一週間か十日の間にずいぶん仕上げたなあ。十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれたんじゃないか、君。」

仲間もみんな立って来て「よかったぜ」とゴーシュに云いました。

「いや、からだが丈夫だからこんなこともできるよ。普通^{ふつう}の人なら死んでしまうからな。」楽長が向うで云っていました。

その晩遅く^{おそ}ゴーシュは自分のうちへ帰って来ました。

そしてまた水をがぶがぶ呑^のみました。それから窓をあけていつかかっこの飛んで行ったと思った遠くのそらをながめな

がら

「ああかつこう。あのときはすまなかったなあ。おれは怒った
んじゃなかったんだ。」と云いました。

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第十二巻」筑摩書房

1980（昭和55）年1月

入力：水口充、野口英司

校正：野口英司

1999年7月23日公開

2008年10月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、
制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ゼロ弾きのゴーシュ

発行日 令和元年8月10日

著 者 宮沢賢二

発行者 長尾貴憲

発 行 一般社団法人日本電子書籍技術普及協会
大阪府大阪市北区梅田1-11-4-1000

© kenji miyazawa, JETDA 2019